



如2  
門本  
新  
卷

中橋鶴峯著

語學新書

全

一名西洋仮字必讀

東都書林

文岳堂櫻



刻語學新書序  
予寒鄉鄙人於文學毫無知解然人  
心之靈莫不有知敬謹敦厚吾知其  
可尚矣貧漁殘詐吾知其可戒矣乃  
知鶴峯先生之能導人於學嘗與從  
兄易信相共從之先受其語學矣蓋  
以其所聞曰琢玉者必治錐鑿學文  
者須明語法不解語法而脩辭猶無  
錐鑿而琢何能成器邪夫性靈所鍾  
秀氣成采

島田序

〇一

皇華言辭傳於天上。聲韻清朗。品格精密。貴賤男女。平生語言。造次顛沛。莫有所違。海外使人。至驚嘆以為奇事。不亦宜乎。然至其施諸漢字。則自非併語法之與字格。而能熟滑焉。不能莫錯謬也。於是古博士家之學。建助辭法。以無憲章。孰不遵此。後世儒者不事語法。讀書作文。不辨主客。豈唯言見賢變色。犬馬養人類哉。良可嘆矣。印度有八轉聲。十羅聲。遠西有

十品四格。與我語法。雖精粗不同。其義不相戾。鉛槧之士。不可不知也。我先王求美于野。百家之學。莫有不備矣。而如夫八轉聲。原是訓語之法。漢譯唯傳其義。而失其音。至十羅聲。則音軌俱无傳。而我所求。唯在漢譯。是千古人之所以不能悟其法也。物子解書。殊多牽強矣。而如論其文法。以形狀作用聲辭物名四者為準。稍可庶幾於語法也。至法住師著攝八轉

義是亦固有所未盡而論楚則者舍此書將取何書乎同時本居富士谷二公起而專論歌文助辭繼志築藤林諸氏出而盛譯遠西語書文運既動語法將振焉唯恨其親彼者疎此親此者疎彼而未嘗聞有合彼此而大成者矣鶴峯先生學極字內識洞古今折中諸家而著語學新書劈肌分理沿波討源證據的實昭然可鑑豈非合彼此而衣被學人者哉予於

文學毫無知解亦知斯書之宜傳不朽因與同門諸君相議遂請以刺諸梓敢題此語爾  
天保四年癸巳仲春

參河 島田易清謹識

白杵藩河村脩絲 書



於海也。下。書。秋。海。ハ。天。地。下。の。一。を。示。す。  
海。道。中。に。鏡。水。反。り。映。り。あ。ら。ま。る。宮。寺。の。影。  
如。玉。子。の。如。く。あ。ら。ま。る。米。を。増。す。業。に。  
魚。以。味。を。示。す。此。所。に。生。ず。以。魚。物。之。形。  
也。以。立。言。人。事。も。海。に。依。り。生。ず。海。道。を。  
新。の。郡。一。天。竺。西。崖。に。阿。羅。漢。何。之。撰。の。  
七。心。の。學。を。其。時。候。文。に。示。す。其。之。起。

此處に、  
海道の  
風景を  
記述する  
内容が  
見られる  
が、文字  
が非常に  
小さく、  
読み取り  
が困難な  
状態です。

長道はつとくし好らねん。人々自に能く可た  
之れいへ生<sup>オヒ</sup>たまふ。あしつゝふふ多  
多子多言やう好れよ。とてさう程廣う  
授ひてよ。思ひし其由あり。儒佛乃学  
亦り其指。何れ業<sup>ノ</sup>の学も其指。そのと  
契<sup>○イハナキ</sup>に成りぬる業<sup>○イハナキ</sup>はさうとたるを  
多し辨<sup>○イハナキ</sup>をたすおたすことあり。其<sup>○イハナキ</sup>もさう

人老んおれつとあつて。長生人能く可  
たすやう。いづれもさうある。そのを  
長よとてさうとて。此世に生<sup>○イハナキ</sup>て。乃  
太古國の事。そのいへるやう。何  
れか河<sup>○イハナキ</sup>を流<sup>○イハナキ</sup>たさう。後<sup>○イハナキ</sup>に又<sup>○イハナキ</sup>和<sup>○イハナキ</sup>て。さう  
とて。其の。おれん人の助と。来<sup>○イハナキ</sup>り。つ  
て。其の。儒<sup>○イハナキ</sup>佛<sup>○イハナキ</sup>の。儒<sup>○イハナキ</sup>佛<sup>○イハナキ</sup>。



この由り書置。此の如く可なり。書置。此の如く  
ある日。寺に試み。此の如く。天保  
四年上元日。松屋主人平小山田與清存

論學新書の序

夫、世に於て、  
知識の増進、  
文明の発展、  
は、人類の幸福、  
を成すに、  
最も重要な、  
要素と、  
認めらる。故に、  
古今東西、  
諸國、  
は、知識の、  
伝播、  
を、  
常に、  
努力、  
して、  
來り、  
たり、  
と、  
思ふ。然るに、  
我が國、  
は、  
昔、  
より、  
知識、  
の、  
伝播、  
に、  
乏し、  
き、  
と、  
思はれ、  
たり、  
と、  
言ふ。故に、  
今、  
は、  
知識、  
の、  
伝播、  
を、  
最も、  
重要な、  
事業、  
と、  
認め、  
たり、  
と、  
思ふ。故に、  
今、  
は、  
知識、  
の、  
伝播、  
を、  
最も、  
重要な、  
事業、  
と、  
認め、  
たり、  
と、  
思ふ。故に、  
今、  
は、  
知識、  
の、  
伝播、  
を、  
最も、  
重要な、  
事業、  
と、  
認め、  
たり、  
と、  
思ふ。







あはれはあはれなるあをせしむるは

さきかへしつゝ乃のあはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

ひよひつゝあはれなるあはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

てなすゝあはれなるあはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

あはれのあはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

あはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

あはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

あはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

あはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは

あはれは、いふにむらさきかむらさきのあはれは





語學新書序説

中橋鶴峯撰

此書を字詞の品定と名づきて九品又九品を附録又二巻を  
べて二十巻を置し然してハ其業のその勝字もたやをうらぬハ同盟  
ありと有りてつひは師はこひて本書は志を節して二巻とす  
つるを名をあらためて語學新書といはせらるるなり

○師いそく天地の万一切れは物ありて二天の創業志は所あり  
中にも言語の是れは其の神世の古訓もあきよりて傳はり  
聖人の名教もあきによりて流きたり天下古來語法をいふもの  
皇國は帝ル平波あり漢は韻法熟字法あり梵は八轉声十羅声あり蘭  
又十品四格ありと云ふこれ前聖の究理もあて言語文字は品格を  
必みちよりて申語名を以て諸家を折中し論定して九品九格と  
世間を量りて貴賤男女老若をわくもの則ち順ぐひ平生の語云よく  
呼びよる應へ差ふ所あることありぬあく其格を失ふものハた初  
學脩辞の是れあるものもだし平云ハ天工もあづ故又差錯多し脩辞  
乃如きハ人為るあづ故又謬乱あるべし申學者をして謬乱の弊  
ありと云ふんとわめんとわめんとわめんと語法を講究せし諸子百家の書ひと  
つゞいて語云はあらざるをせしと云ふるに語云は於てこの格式あ  
ると此ハ書を讀みん人辭を脩めん人あざらざるこれをよまばざらん  
○師いそく天のけい語かきこき同じうらざれども言語の別ハ二等  
又ハ三等ありと云ふハ一つハ訓語二つハ韻語を以て五大洲

序説

〇一

の中、韻語あるハ漢と字とのみよてこのなりハ皇國より印度諸  
國よあるまてそ訓語よりその別ハ二等まわくれりやいそと  
もその語法は捨てハとも一種よりて其法より一つより二つあ  
ることなり物も漢籍を讀むよりハ從頭直下わきハ順逆廻環を  
かよつて世人ハいとく異様なるやうなりのこととそとそハ  
うあつて廻環の讀よてこそ其法をハあきまふ處なき壁ハ巴明人の  
此方ハ歌詞を註するがめき讀法ハ阿氣那塔那革里復那一屋那の  
て切さハ秋田收稻結舍者守あるがめしをいしよて廻環の讀よ嫌あら  
バをべりく熟字を推し漢吳二音便ハ從グハ直讀をべしとそと語  
法よその形をハその熟字をかひあをゆきといやざるべしそと語  
法ハ多語文字ハ各派を正を名を正をハ仲尼此さよ終こしを  
馬の論ハ世の學者たちの講出作文よとよあり謬妄のありことハ他  
ふみ此を正とらるる故に壁ハ論語の學而時習之れとて此學  
而二字の連まりて學字ハ去活用云而字ハ速及接續云とあり時  
習之三字の連まりて時字ハ時令形容云習字ハ現在活用云之字ハ  
再說代名云と志がめしをし是等此字各々連るるは各々分誌せば  
ふ不人の裸作よて箕踞したらんがめくその士よ農たる何をもて  
りあつて應よとよとよと連續したりやもをい語法を志るもハ時習  
の時も使民以時の時よひとつよかりひよかへてんされハ衣冠ハ人

其以分別をも所熟字ハ語法を分別も所熟字ハ物氏文章を論するに  
虚実死活の四つを準と志るハつづつ語法よ公のつきたるまれば  
あつたが九品九格よかよバさアつゆ急時習の時字をもときひがめ  
たて學者これをためん  
○師いよく悉談章ハ二種の釈あり一つハハ深秘二つハハ浅畧と  
てこが説くところハ浅畧ハ釈ありて深秘ハハあつたりて悉談字女  
四十七字ハ梵天の所製ハ梵天をよと大自在天と彌を梵人の傳説又  
此ハ三類あり其六天の王を伊舍那と彌をといへり伊舍那ハ暗又二  
具ハ尊稱ハ涉り梵文をよと二具諸神の所教又係あつてを志るべ  
し義弟ハ南海寄歸傳よ據るに大自在天の所説ハ悉談六歳の童子六  
月よ字ハハハ次ハ蘇咀羅よと馱觀葉羅等此章あり蘇咀羅ハ声明  
の根本北天竺乃健馱羅國よ波你尼仙が造るる馱觀ハハハ字  
元を明せり棄擲ハ荒梗の義田夫のめらきハをらめし分ちて三  
章とハ一つハ八類瑟所七例十羅二九韻を明せり二つハハ文茶  
合成字を明せり三つハハ鳥擊地大ハ前例よ同じ廣略を異とらるの  
こととそ三荒章といふ上古書を作て蘇咀羅を釈を其類の多し  
そが中ハ中天那爛陀寺ハ學士闍那跋底が説最妙まるとそそ此後  
學士鉢顛杜擲伐擲哥利等が輩ハひつきてよめく其義を詳しあき  
ら此諸書國中通し學ぶといへりそそ人生きてハ歳ありて小学ハ入  
り十有五歳よりて大學ハ入るハ漢意のさよとて悉談よ西洋の









○才四所役格トハをト云助辞ノ格ナリ  
 ○才五所奪格トハをト云助辞ノ格ナリ所格ハ猶臣ノ如シ  
 ○才六呼召格トハをト云助辞ノ格ナリ是ハ客位ノ助辞  
 ナリ以上六ツハ体言ノ助辞格ナリ  
 ○才七現在格トハをト云助辞ノ格ナリ現在用言ヲ受ル助辞格之  
 ○才八過去格トハをト云助辞ノ格ナリ過去用言ヲ受ル助辞格之  
 過用言ヲ受ケバト云助辞ノ格ナリ  
 ○才九未來格トハをト云助辞ノ格ナリ未來用言ヲ受ル  
 助辞格ナリ以上三ツハ用言ノ助辞ナリ  
 ○凡テ本書ヲ讀ム心得タマク解シ難キトコロアリトモソレハソレニ  
 シテ先一過讀ミ畢ルコトヲ要トスベシ一過讀ミ畢ルトキハオノツカ  
 ラ其義ニ通ズルモノナリ譬ヘバ実体言ノ條統稱実体言ノウキ一  
 名統稱日類二名統稱晝類多名統稱光類トアル力如キ日ト云モ晝ト  
 云モ光ト云モコレニ十実体言ニシテ其実体言ノ中ニテモ晝無ニ属  
 セル辞ナリト知ラバ一名二名多名等ノ義ハ捨置テ讀ムベキナリ一  
 名二名ナドイフハ猶一字名二字名ト云ホドノコトナリ夕ト晝ト  
 等ニ准ラヘテスベテ実物アル体言山川草木萬物ノ名トハ統稱  
 実体言ナルコトヲ知ルベシ本書モト凡例ナシ今童学ノタメニコレヲ  
 書キ加フルモノゾ  
 九龜藩 橋山北茂樹

目録

上卷九品

實體言第一	分爲二等	虛體言第二	分爲三等
代名言第三	分爲六等	連體言第四	分爲三等
活用言第五	分爲三等 又有九法	形容言第六	分爲十八等
接續言第七	分爲十二等	指示言第八	分爲四等
感動言第九	分爲十七等		
下卷九格			
能主格第一	分爲三等 併結辞	所生格第二	
所與格第三		所役格第四	

取奪格第五

呼召格第六

以上體言助辞六格

現在格第七

過去格第八 分爲二等

未來格第九

以上用言助辞三格

語學新書上卷

中橋鶴峯著

○實體言才一

实体云ハモべて一切の物ハ名辞ナリテ漢又ハ心とゆハ  
実字ナリコト多シ統稱各稱の二等アリ

統稱実件云 是ハ一物の總稱ナリハ中又ハ多クトシテ此ハ差別アリ

一名統稱

日類 記上あをやま<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>から<sup>ニ</sup>バぬをたまれよ<sup>ハ</sup>いでまむ

二名統稱

書類 記中うきびやま<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>てあゆめ<sup>ハ</sup>終<sup>ハ</sup>ばうぜふ<sup>ハ</sup>むと  
ぞこのことわざなり

多名統稱

光類 古春<sup>ニ</sup>くら<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>ひ<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>わ<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>され<sup>ニ</sup>ど<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>ゆ<sup>ニ</sup>き  
とふるぞ<sup>ニ</sup>び<sup>ニ</sup>き

一義統稱

月類 古秋<sup>ニ</sup>つき<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>せ<sup>ニ</sup>バ<sup>ニ</sup>ち<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>こ<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>わ<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>ひ<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>  
あ<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>や

二義統稱

月夜類 古秋<sup>ニ</sup>つき<sup>ニ</sup>夜<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>  
む<sup>ニ</sup>び<sup>ニ</sup>つ<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>結<sup>ニ</sup>む

多義統稱

月人男類 万<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>初<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>ぢ<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>きて<sup>ニ</sup>こ<sup>ニ</sup>ぐ<sup>ニ</sup>え<sup>ニ</sup>ゆ<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>壯<sup>ニ</sup>  
子

上卷実件云

才一統称

獸類 古長くを里々うせらるる 毛能和物 毛能荒物

才二統称

駒類 右慈ちてといふは 統称 をれまへるふちしこハ

才三統称

黒駒類 雄畧紀ぬたまれ 都麻阿迦胡麻青駒類 阿一げふと

轉用統称

恨類 右序をいあを 浅類 古長我慈ハ

小統称

小款類 右慈をちぎ 去声類 火とり

三声統称

平声類 日とり 男声女声中声とり

一統称

女類 記上吾ハ 記中袁登賈

二統称

少女類 記中袁登賈 少女等類 万一

多統称

爾無礼逆在流 又記中 万世若草之都麻母古騰母毛と也

と呼ぶハ男声めめとよハ女声といハ説をたりこハ悉談の説より多るりのときこの漢ハこの三声入声を加て四声といふふ清の毛奇齒が韻学指要至魏時李登始取其声之同者而分聚之各曰声類然而猶無四声也及齊中書郎周顒著四声切韻而梁沈約倣之因之有四声類譜之作夫然後就一類之中而又分四等といへる是を四声と云ふ也漢人の声ハ長と短と二つありて其長短又各三つの差別あるを長声の方のを三つ又分せて短声をハ一つ又渾じて入声と云ふての差別あることをと云ふて万国の三声皇国は同じといふはハあはれおのひまがへそ

上巻の案件云



枯野類 記下からぬを志すやまき志があま里ことみつくりかき  
命婦松毛登類 松草子異本うへまきふらふはねこハかうがりの

會獸各称 項羽紀駿馬名驢常騎之この松をむらへ志るべし 又金太郎い  
とし源ふらふあしどやう各称又似たる統稱ありを混てそよ

小称各称 小黒崎類 右赤松をくろざと記みつこの語の人あつ巴都の松とよ  
をこつせみを理をどめ同じ

三声各称 上声類 記上 次成神宇比地迹上 去声類 記上 次妹須比智迹去神  
平声類 記上 平声を註せざるハ平声ハ常の声をばま終べし

複称各称 忠安寺類 古序あまの松うつりゆら 史何等 驃騎等 繇王居股  
等 駒術淳子 髯接予 慎到環淵之徒

配合各称 大汝少彦名類 万三 堯舜 舜禹論語

○虚体云二 虚体云ハ実体云ハ附属して其深淺輕重あるは形容を  
る辞にて漢の虚字ニ此又副上副下比較の三等あり

副上虚体云 此ハかき或ハぬある等の韻をふえて体云の上ハ附属する辞  
ニ漢語にても体云の上ハ冠らざる有無刻寡難易等ハ此格ニ

幾韻副上 深心類 右志をけあきこえぬたく山乃ふうきを人ハ志す  
深淵類 和名土佐国香美郡深淵布加不知こせらふりきふちの義  
倍幾副上 可見君類 右離別胡子々々見べき君と一松ま子バ思ひまぬるま  
奈幾副上 無水空類 右素さくら松をちりぬり風のまごりハあまよをた  
志幾副上 新年類 古大徳阿さうしたまはれらぬにかさこも子子をうぬ  
志幾略幾 空煙類 右誹諧めじれ松のあつぬあひよりえバのえ松ごまきこ  
幾幾副上 不可寄川類 書紀下りまき川のくまへ 原氏よゆまきすち

又詞花け世ハすこもるまき松屋ちあぐあふんこぞかき  
しきこハ波のうへをまじと結べるよて副上此格又あふび  
上卷虚体云 ○四













淮陰侯傳此乃信之所以為陛下會 呂后紀帝廢位太后幽殺之  
八佾樂其可知也

者再說

者類 右雜大うハ月をも先でしこきぞこの流りれバ人のかい  
とにひて物よもへるもをぬ月のあり

所再說

所類 此ハ漢籍よみの辞またなくありて上代の文よハ流てき  
學而賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者

同再說

同枝類 右秋同トを記してこのとれうつ流ハ西了秋のそ  
孟季梁惠王下姑舍女所學 書假祖之民の攸も同じ

疑問代名言

疑ハる物をうごかひとふ代辞よりてこれハ物よあづかうと人  
公治長曰何器也 平原君傳予秦地何如母予孰吉

非情疑問

何類 古春まてといふふちうてしとぬる物あうバ何をらうくに  
公治長曰何器也 平原君傳予秦地何如母予孰吉

有情疑問

誰類 古秋みみち紫のたてはゆれる日かゝるとは誰をまつ虫こ  
子罕吾誰欺と天乎 述而伯夷叔齊何人也 項羽紀客何為者

汎称代名言

すべてこの疑問代名言はオニ純格の助辞ぞやう等れつくとい  
ハ疑問法とを格とわうべし  
こハひとつにうたはらひてひろくも汎代辞なり

然汎称

然類 古雜和が庵ハみやこれもつと志くぞまひよをうぢ山とく  
ハいふこ 又さハ志のつとまりとる辞

如是汎称

如是類 古意世中ハかくアそ寄れふく凡のめに足ぬ人も多  
かりん 同序けちもかくれごとく言べし

范藝傳先生奈何而言若是

皆汎称

皆人類 古哀傷ミまハ花の衣ハ形りぬありこまのあややよか  
顔淵人皆有兄弟 李將軍傳一軍皆哭

諸汎称

諸人類 拾遺あまこみしとよれみそぎれあろくの君し中物をか  
ハハも終うか 五宗家諸幸姬常侍病

幾汎称

幾世類 古雜これんても久くなりぬ位のはれきハ此姫松茂  
へぬん 脩吏傳如此幾何頃乎

數汎称

八千度類 古哀傷さだぐぬこい乃ちさびらけきハ流る  
ものうへりこぬあて 述而加我數年

各汎称

この不々 各國のぬぐひまやあれぬしそハと那子ぞらへてある  
べくん



都る現在 出月影類 左難ゆらみなりめのとこひーをみふ底よ山のとけり

布る現在 志君淚類 左志君あめる候のとこよ又ちぬきバみをつくとぞ

武る現在 鳴留花類 左妻女記とむる花下ぬき巴掌もててい物うく形う

由る現在 見白雲類 左春さくく雲咲よまうしをいひぬきの山れくひより

留る現在 流川類 左妻もるおとに流す川ををまると見てをくまぬぬ又禮

高祖紀願從者十餘人 衛灵公如有所警者其有所試矣 孔子系

遇高祖丈人 檀弓魯人有周豐也者

右此めく現在を件云に多現現在用云り 能格の結辭とある時

ハ下の実件云又續くことをぬきうあう切り格

現在用云のくむつむひ引ハ才一能格はもの結びと才二能格の

の和れ結びとけり等とあるむつむひ引ハ才一能格はもの結びと才二能

格の和れのとむむむと多結辭

まとのぬつる引るといふて花さきぬきまきつりみぢさき

が別あどやうにのハ辞ハ才一能格はものを添てまきこの結辭

してめとより連件云をそづれて切り辞あり

過去を件云

こハる去用云川あてしと目ど死まのけりてかへりめ

志と去

結水類 古春袖ひぢてむむひ一のこ不せるけりうくめ子の

尔志と去

来心類 古離別志ハまてきありかろ身に一乃是バうへると

互志と去

降隱道類 左秋婦と知きてけらあやとむむみぢ紫のありかく

氣と去

咲花類 左妻女とく山の山べよゆらるさうう雲雪うこのとぞ

世と去

曝布類 左難あがさめに引てけらさる布をまやよをくとんれど

互と去

立松類 左難かうつつと世をやつくさむさ砂の尾上ふさてる松

閑と去

白雲類 古妻もるさ絶にやへる色もありぬくにあさへまつ

免と去

霞世類 式子内親王集はるうを免る上れまききうあ

礼と去

氷淚類 古妻あれうちふ妻ハ其又々中堂のこ不まぬ候いりやと































魯鄒傳吾與言貴而誦於久寧貪賤而輕世肆志馬 酷吏傳寧見乳  
虎無值寧成之怒

禁止形容云

こハヤヤキヤウたるをの何カゆめ ゆり子のりそヤキ比辞マ  
して漢字比母勿莫等ああなり

戴奈禁止

莫鳴類 古秋まきく吹いしく吹くまきそ 同奏うまが登ハクあを  
マヤキそ マハ山任ハ吹やあくま記そ 万七妹が何と

り己が神ゆん本男よりいでる月ほやまあひき 同十七  
あやるとま己ひ己がせこ是らハ下の指をえがなり 拾遺を

いあれそ毛ハ列を争て下ををといへりそハをを強う  
てよりともいふべし 元補集ハ美かをみたちあよりそ

とよめり 夫木角何れバとて身張ハたのミそこハひかこと  
新拾遺めありのりそやまりぞをこハ上又ゆををを

勿語類 古秋まきかちみきと人よりをを 同今さうに少く  
かへりををりくざん 同意さふの川かゆ花

履奈禁止

雜也母以十モノツのさ 顔淵非礼勿視非礼勿聽 高祖紀非  
親子弟莫可使王齊矣十ヨク王タラシメソのさ

こハ天うハまどのとぞひめてりそう辞云

料度形容云

大方歸類 古離別人やり此きかろまくに天うハいさうと  
ひりさかへりまむ 同難天うハ月をもちてじ

大氏料度

大方歸類 古離別人やり此きかろまくに天うハいさうと  
ひりさかへりまむ 同難天うハ月をもちてじ

里仁蓋有之矣 季氏吾恐季孫之憂不在顛也而在蕭牆之内也  
淮陰侯傳顧王策安所决耳

疑問形容云

こハ疑問代名云の何誰等の辞は初初カ対してあどの助辞を  
えて形容云とまきる云 万三ありあめやまは疑問形容云

歟疑問

涼歟登立寄類 六帖すばしややまむとにさちよれば 後撰  
くやくとよムタられと

何疑問

奈尔臆類 古難ふ山びめれ布さうまむ 同意まひをさ  
いひん 同難うまう記をあまひつらむ 後撰

まふせん 同い 古序子ふりハ 勇を即とあざむく 六帖ま  
新撰古あめく嵐のとこをららん 新勅あそれ子あに思ひ物多  
見つらん 古意何ハ人をおひそめん 後撰まあて人又何あ  
きてまむ 万ニ老あにうもは六々うら 記君が怒を忘  
まらめや夕衣をむき冷やうく形容云ハいら句をへて

一丸下此用云まかふる心物う先達の記又あまハあめ 初  
めて切まうりあやのわへりけて見でうらばといへるハくハ  
しうらざん 古意あうりもひと免つてま世記をむらん  
ともよめり 躬恒集ゆきやうぬんや子あぞこハ何ぞのきやう  
ぬのを 古離別かへり山何ぞハ考てこハと何ぞぬ又あめい  
せ物語あらむり何ぞと人のとひし附 古意はれ金のま小を思

上巻形容云

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六

〇二十六









須良類 曾丹集とけてすくぬる初どもなまきありぬをぬざめがち  
おてありのころうが

乃美類 古恋人志重ぬ思ひのそこそびびりたれ 予の家歌きを  
いふれのこそまの 同詠諧謔きあそびをそのとせむむ

余利類 古恋いまこんといひて口くれし あしよりあひひら  
しねぬをのこそま

万傳類 古雜みやこそてむいさかよんか かくことハ 同突いそ  
初とありてこそむむをちては下ハ 堅世と詞を伝せし

加良類 古雜我がうらふき世中とをきまつ 同秋あくうら  
秋の草木の志をるれバ 治氏ミくどの花子あうらう

古恋 交後女葉ふ谷のうこそまに初めうらうその花のやいめ  
古恋いつとらとありありのうら 同妻紅つうや

由惠類 古恋人めゆ恋のちにああひのちのけくハ ちこゆきて  
いさめりいのゆ恋ま

那武類 古物名よりとよりとをられておひつとよめやこれあひそ  
れとつとをらんうし

基登類 古恋あめまバ木ごとくに花をさしたるんハ 同恋風あくお  
とにあめあひぞつく

毛巨類 古序とちす紫のよごりにいすぬあて 拾遺あてち  
らんごまこそをうらうめ

志豆類 古雜ハまむぐらして門させりてハ 伊勢ぬ語ぬり  
てむをひいひををひとらして 新古宿ハかくして

加保類 後撰年ありぐはにこひいさなそ 金紫むくき  
るがらうて梅がえれそに我又そのがかりせを

奈賀良類 古秋さしむ人ハ枝をかくみよ 續後撰つうきまが  
られとのそさるべきこハ件云いひりたるん

賀豆類 古雜なごり我身のいでてにをる 同妻すきげてより  
人のさくらん 近昔語あてのハ件云の格ん

賀豆良類 古恋ぬきまへがてうらよこそハきめ 後撰ぬ人の  
うこそがてうらをうけりき

波加利類 古恋志ぬめ命いさきもやまるところこま 野のこバ  
をむむといをむむ

万類 後撰時日うば厚う香うらとて教やてまかきねのまくにさ  
をむうのそま 古雜あしひの山のまにくかられむむ

都類 古秋池でとに秋ぞあし記みぢつうつろひゆを  
むととへバ 同雜はくをのうらとごとま豆ぞよる

ちののそやまのうけをこひゆにこハ上へうらん 同春さ  
がそみたてるやのうらこみちけき 春あふさ 春ハうらつこ  
ハ下ハ春見エ又者ラとりの 詞をふくあり 餘情つくとらハ  
是ここまこ形容云のそい

上巻形容云









八佾自既灌而往者 鄭陸傳自天地剖判未始有也 平准書興  
利之臣自此始也 范蔡傳先生之壽從今以往者四十三歲  
此ハ下文ハカヨリテ 漢字の而ハカ  
まり訓蒙題式ハ血脈貫通非此字不可トカヨリテ漢字の而ハカ

互逮及

互類 古雜傳此カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

互類

互類 後撰字此カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

互類

互類 古類 後撰字此カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

敢保接續

學而學而時習之 高祖紀始大人常以云今云 五宗系及憲王病  
甚及王薨云 雍也文質彬々 然後君子  
此ハカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

請敢保

請敢保 古雜曰カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

登波說明

登波類 古序登波カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

曰說明

曰說明 伊波婆 古序カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ  
カガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテカガハカヨリテ

上卷接續云















教諭カトシ感動カトシ重カトシ云カトシ 子張カトシ 大禹讓益曰吁哉カトシ

叙教諭カトシ 叙類カトシ 古雜カトシ 大月カトシ 十八日カトシ 叙類カトシ 古雜カトシ 大月カトシ 十八日カトシ

通用感動カトシ 加類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ

又人のあるべく我あひカトシ 毛類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ

奈類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ

千載カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ

考カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ 古英カトシ 玉カトシ 毛カトシ 類カトシ

以上九品

以上九品

詞葉の錦下巻

本居大人著

中橋鶴峯校

○能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

よゝゝを不君の如く所ハカトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

とりのへバその等カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

その等カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

法といふる上巻活用カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

主格を日カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

才一能主格

はも此カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ 能主格カトシ

下巻能主格















吟類 古の物後山ゆくとよまれをとりてわくれ流のゆきのまゆ

類 古秋山のふりさのまきバ 類 千載を候よりて志

現幾 古のいふやれそよとの 現志 後撰ちりぬる花の志

良志類 建保四亥合さうり此人 言利 新古ありてさつきのか

奈利 千載志がうりそよか 加奈類 新古たらざるの言すら

左也計左類 古秋めゆハんて考のさやきよ 後撰よのみお

格 万三ふ子の里しきん手の志のさく 十いさごま

ハ形容云まきバ件あてむをづる格とハいさてり

人心乃類 古吹吹まよゆ風をきみ秋さきのつりもゆく

還上乃格

人の志のてくうく形容をよりうりる九のよりうりつると同じ

乃結轉格

乃結轉格 奈留轉 古雜 乃のうへよりかざる秋の君ありバあ

能主相重格

能主相重格 乃與許曾重 後撰 乃のゆかふたをまくをみりてをこめた

乃属賀格

乃属賀格 君賀類 古雜 乃のゆかふたをまくをみりてをこめた

賀結辭格

賀結辭格 和昆志左類 古雜 乃のゆかふたをまくをみりてをこめた

ひちり侍のさうごちてさごのこそのゆべきふそ女がけ  
さごといふるまきうといひしるはゆ  
遺ふさよの衣をぬきうらうをとめ房のよみうをゆべとい  
すこ万十九かちん山流を君があえすくハ形容云ん 又宇治拾  
和昆志左類 古雜 乃のゆかふたをまくをみりてをこめた  
さのがありこハ要須感動云うて更なり

賀結轉變格現志轉爲志尋類 後撰秋の因此い祇であらと改りけしうバ品

也受押云格我也類 古意老の万あも系や日 疑問法のや日し 浅也類 拾遺あさしやふりそ

重也格 我也人也類 古意受あごまきすかてくゆゆハ 志やいをぬぬ人

也結辞格 久也 古春うつろちんとやまう 須也類 後撰備用やとそは浪こ

都類 後撰あひの浅さゆや人ハか 不奴類 古意月やあしぬ妻居む

武類 後撰拾遺よそののミをてやハ 武類 續子やくとハかくるまき

現志類 古秋わが祇ぬごとや 現志類 千載あふふらと子枝ふ

不志類 古春みちゆき密りにこ 良志類 後拾きしほるやそは祇

新古のりーに秋れりーとやてうた山 後撰これのゆも

も今も衣をうつ月山の 同あをて月や 志類 古意きみやら 日まきや

すて後撰あはれやまのそぐらん せられとぐひとやれう

のうー甲を新格とて説いひかこく

也属合助辞也波類 古春をこそん 後撰あはれやまのそぐらん

古雑 何トテアカレヌのま 又あまにむくらす 志類 古意きみやら 日まきや

也毛類 万四うつをまこれやま 波也類 万九ねこれめて我そや

毛也類 古意さびしうにぬりーとまきこよひもや 志類 古意きみやら 日まきや

下卷能主格

登也類 上日足

〇九



ナカ  
奈武合助辞叙奈武終 土左日記のハナガモをよんまらるる 是ハナガ

一ナカ  
尔奈武余類 ヲゴロハ日記ありれハナガモをよんまらるる 是ハナガ

をそのされハナガモをよんまらるる 是ハナガ

ナカ  
ナカモをよんまらるる 是ハナガ

加受仲云格 今日如類 万一ナカモをよんまらるる 是ハナガ

らげけれをつけたりハ格ニ其例ハ 後撰ハハナガモをよんまらるる 是ハナガ

人の云はれハナガモをよんまらるる 是ハナガ

重也與加格 此也何如類 千載ニモハナガモをよんまらるる 是ハナガ

れハナガモをよんまらるる 是ハナガ

省加格

ナカ  
奈土類 狭衣ヲヨムハナガモをよんまらるる 是ハナガ

すべてハナガモをよんまらるる 是ハナガ

ハナガモをよんまらるる 是ハナガ

ハナガモをよんまらるる 是ハナガ

ハナガモをよんまらるる 是ハナガ

ハナガモをよんまらるる 是ハナガ

ハナガモをよんまらるる 是ハナガ

加結辞格

久於後撰をヨムハナガモをよんまらるる 是ハナガ

下巻能主格





重許曾格

深許曾色尔許曾類 後拾ありさこそ其の衣ハあさきしめ候ハお

きバのそこそこの何のたすバのそこそ志まきれおるやど

許曾結辞格

計たるなるそふちも遊よる 世に堀川るそあろのそくに

互類 新古のそふちも遊よる 志きりこそま

閉後撰わつれバ神こそそ 免後撰み菜ハつおき多と

さみとてに抄を免あ 万十 祢類 後撰が多とまき枝

之命早ハカヒケメハ非じ 祢類 こそあれ 古名名あ

君を修まらりつれ 又後の 現後撰 仁徳紀あろも

抄ハ修べもえき初キハヨキシ 万十一 天智紀あゆ

おき 日十二 又十一 かのが書に抄とこめづ 志きか

とゆ結ぶ 又十四 抄を志 駿河秋古止百曾余之

過抄類 後撰時面とくもにふり 志加類 拾遺人志き

良志類 古難ぬまきさる人抄あらハラマカレ

抄右ののくとま抄を志 又 万六長うべ こそそ

ぬび毛らしきとゆ結びあり 万志加類 ぶらふら

万志加類 ぶらふら 万志加類 ぶらふら

金紫たのびせバに抄のまきま 系こはいきてあて

ひくあさり 後撰後撰後撰をり こそそ 備ご

選とりの抄のひくたり 新古まよ子も好こそちかく

がここの抄といわをひくたり 新古まよ子も好こそちかく

許曾上省婆念古曾類 万四後撰山のちあんと

あらためらハハひかこもる 先達の説も

一もいすへも志うにあれ こそうつせも素を

しき 日十七 長閑さへ入るりてあま 了そ

許曾合助辞 許曾波類 後撰又拾遺とがむむ

ふごり 志もこそ 蜻蛉日記詞に志も

あま 後撰又拾遺とがむむ 蜻蛉日記詞に志も



○カキレ 取生格カキレ 二 取生格ハ仲云と伴云との中間小ありのガシ諸伴云是

らカキレの助辞をねんバ取生の格とふるシ能格の條カキレハ

へるガめく取といふ義ハ能格のりカキレのせらカキレよりなりぬと

とありて言をりて受を生せ志むるさなるがごとしカキレすべ

て取格の实体云虚伴云代名云連伴云を更取ハ能格と同じ

乃受伴云格カキレ白玉之君類カキレ記上ありあまハをせへひうれど斯良多麻能君かよ

重乃格カキレ一能格五生格類カキレ新古冬がまのりカキレのくち紫の重のうへはなち

か中カキレに上五つハ取生格のカキレ下一つハ能主のれシ能主ハ結辞

あり取生ハ結辞なし

三生格カキレ万十三長より里物のよりき山のいでとちのこち

中カキレと万六長あつじれあやん時四あうも候さん時よ是ハ

伴云と伴云を生じたるあて是之十八長ありなれきあて是

く發をもされをきくのうありき二十長山にれバ凡のとち

く川にれバ凡のさやとく是らハ伴云ハ虚伴云を生じさる

四わがせこがゆきのまゆく又大ぶきをこぎのまくみよこち

らハ伴云より形容云を生じし

備語生語格カキレ宇治川之早細代者類カキレ後拾宇治川のそやく河はろハさうり

乃受用云格カキレ將行之類カキレ古云君やこむられやゆるんのいざよひよま本板戸

乃属賀格カキレ元輔之後類カキレ松カキレえ補がのちとちり君よりやこよひの身に

重賀格カキレ爲君我衣手類カキレ古春君がたをさるの登り出てわつをつむが衣

云カキレをうをう

顔淵浸潤之譖カキレ履受之愆カキレ又虐殺之轉カキレ猶犬羊之轉カキレ滑稽傳以楚

國堂之カキレ大向求不得カキレ信陵君傳カキレ臣之客有能探得趙王陰事者

又孟子庾公之斯尹公之他カキレ左氏之推燭之武カキレ此之字非名比自属所

生格猶謂紀之賢之源之義カキレ經宋註之語助也カキレ是

指此言爲聖人言也といへるハ取生指示云のうとれ叙とを

下卷取生格

○十五



















未末助辞格		受		傳		石奴	
加	計	幾	古	君こそて	人いひ	あまの	あまの
左	世	志	世		あまの	あまの	あまの
多	互	知					
奈	祿	尔					
波	開	比					
万	免	美					
也	延	伊					
良	礼	利					
和	惠	章					

叫		万志		婆		願奈武	
子	も	ま	ま	セ	セ	セ	セ
め	め	ま	ま	バ	バ	バ	バ
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの
あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの	あまの

万十七、足れどあうあまの 又そこもあうあまのこのあまのあて  
 同八、きぬとく いをを 十二、たが名ふりあまの 十四、今ハハ  
 みせも 二、よせのこをてやうとらるるも 千載、人もがをんをも

下巻未末格





三都  
發行  
書肆

京都

三條通柵屋町

出雲寺文次郎

心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

心齋橋通博勞町

河内屋茂兵衛

日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

淺草茅屋二町目

須原屋伊八

日本橋通二町目

山城屋佐兵衛

芝神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

下谷御成道

英文藏

芝飯倉五町目

萬屋忠藏板

戸

